

『九代抄』について

片 山 享

一、成立

甲南女子大図書館本奥書に、

右一冊、従後撰集至統後撰集、唯拾遺眼銘肝之作、書者一千五百首号九代抄也。送春鑑尽秋漏而閑窓勅之、專為老懶之難堪博覽又思童蒙之不及深求耳

文龜第三曆孟冬上旬 夢庵拙子

(花押)

とある。右の花押は肖柏のものではなく、書写者(伝姉小路濟継)のものらしいが、この奥書は九代抄諸本に共通にみえるもので、すなわち牡丹花肖柏が後撰集から統後撰集に至る九代集から千五百首の秀歌を文龜三年(一五〇三)抄出したものであ

る。時に肖柏六十一歳である。「群書一覽」には、

九代抄 一卷五本 宗祇法師

後撰 拾遺 後拾遺 金葉 詞花 千載 新古今 新勅撰

統後撰 以上九代の集の中より千五百首の歌を抄出して

注釈をくはへたるもの也。○奥書に云々、文龜第三曆孟冬

上旬夢庵拙子在判。

とあり、これは後述する有注本の解説であるが、作者を宗祇としてゐる。宗祇作者説は古くからあつたらしく、前掲伝姉小路濟継筆本の箱貼紙にも「九代集 宗祇法師撰」とあり、また、「九代抄抜書 貞徳加註」にも「此九代抄は宗祇より聞きたまひし後撰より統後撰までの秘哥の註を夢庵の編をき給へるなり」とあるが、宗祇は前年文龜二年(一五〇二)七月、箱根湯本に

没しており、諸本に共通してみえる右の奥書によって肖柏撰は動かないであろう。もつとも奥書署名は区々で、夢庵老判(内閣文庫本)、夢庵老人(高松宮本)、夢庵拙子(甲南女子大図書館本・大東総記念文庫本)、夢庵老拙判(北野神社本)、弄花軒肖柏(東洋文庫本・宮内庁書陵部本・竜谷大学図書館本)、弄花軒肖柏牡丹花判(岩国・吉川家本・神宮文庫本)などがある。肖柏が夢庵の別号を名乗ったのは文明十六年(一四八四)六月三十日以前で、牡丹花と改めたのは永正八年(一五一一)冬である。肖柏の自署は、肖柏・夢庵の他に夢庵老人(永正五年六月、宗長百番連歌合)、弄花軒肖柏(永正八年正月十四日百韻)、夢庵居士牡丹花(永正十二年、春夢草)などがあり(注1)。文亀三年肖柏はまだ牡丹花を称しておらず、弄花軒の号はおそらく「弄花抄」に因んだものと思われるが、「弄花抄」の成立は異説が多く不明な点が多いが、仮に「弄花抄」が流布本にみえる永正七年の成立とするならば(前掲の弄花軒肖柏の自署が永正八年百韻にみえるのも参考になる)、文亀三年時点では弄花軒肖柏の自署はありえないことになる。もつとも肖柏が後年書写署名した場合はこの限りではないが、そうすればやはり、「文亀三年」が気になるところであり、内閣文庫本が裏表紙見返しに「牡丹花門人等惠筆」とあるごとく、仮に等惠書写であ

るならば、「夢庵老判」とあるのは門人の立場からして蓋然性を有するが、自署としては皆て井上宗雄氏が指摘された(注2)ごとく「夢庵拙子」とあるのが最も妥当性があろう。

肖柏は「九代抄」を何のために抄出したのか。肖柏は前年文亀元年(一五〇一)に連歌新式の改定増補を行なっている。これについて木藤才蔵氏が「後撰集から続後撰集までの歌を抜き書きしたのは肖柏改定の連歌新式本歌取事に、但(至続後撰集可用本歌之由又被定)」と注記されているのと関連があり、この頃には古今集から続後撰集に至る十代集の歌を本歌として取ることができることになつていたからだと思う。ただし、この抄が九代抄であつて十代抄でないのは、古今集だけを別格扱いしたからであろう(注3)。と指摘されている。事実、「十代抄」が室町期には行われていたらしく、二種の十代抄が現存している。すなわち神宮文庫「十代集」(四冊)は第一冊四季、第二冊賀、離、騷旅、物名、恋、第三冊雑、第四冊哀傷、釈教、神祇、序を取め、各冊古今集より続後撰集までの歌を抜書している。もつとも詞書を記しているところからみて連歌本歌取や証歌のためとは考えにくく単なる十代集抜書であろう。今一つは「十代集」(十代集抜書、十代集抄出とも)で、古今集から続後撰集までの抄出歌を春・夏・秋・冬・恋・賀・別・騷旅・哀傷・神祇・

釈教・雑・物名・誹諧・（長歌）に部類した都合二一六七首の

抄出である。両書とも奥書・讖語の類は一切なく、成立は不明であるが「十代集抜書」は詞書をも含めた十代書の歌順抜書で江戸期写であるのに対して「十代集」は部立毎に歌題による排列となっており、室町期写本を有し、前者よりも利用度を考えた整備されたものとなっていて、前者よりも後の抄出と考えられ、両者は無関係に抄出されたとは云うものの共に室町期に行われた抄出本であったと思われる。こうしてみると、古今集（後撰集）―統後撰集の抄出本は三種となるわけで、おそらく「十代集抜書」や「十代集」は「九代抄」成立以後、別の観点から抄出されたものであろう。もつとも疑点がないわけではない。神宮文庫「十代抜書」は上冊は後撰集から統古今集までの十代集から集ごと抄出した六六九首を収め、下冊に堀河院両度百首から五〇七首を抄出し、注釈を付したものであるが、奥に、

此十代集并堀河二代之抄出、種玉庵宗祇禪門為連哥士或付合之便或為詞或為讖難儀抄出給者也、温洛中先達明不審由有密説、此一巻無殘処某遂伝授、受多賀若右衛門尉助経数寄之志不淺期望之間私眼瞼振老筆至季秋之尽書注畢、可廢忘之事多然者不可被出箇外云々

以上十代集両度百首一千六十三首

宗頼判

とある。宗養（大永六年一五二六―永禄六年一五六三）は、宗牧の子で三十八歳で没した連歌師であるが、奥書によると、「十代抜書」は宗祇の抄出であったとするのであり、これによると宗祇は古今集を別格として後撰集より統古今集の十代集から抄出しており、古今集から統古今集までを本歌取歌として認めていたことになるからである。

「九代抄」の抄出歌数を掲げると次のごとくである。

	春	夏	秋	冬	恋	雑	
70	9	5	11	4	25	16	撰
141	14	7	10	7	36	67	遺
206	29	13	43	15	41	65	後拾遺
60	7	9	14	7	4	19	金葉
40	4	3	4	2	4	23	詞花
133	14	15	22	19	23	40	千載
531	41	32	122	61	46	229	新古今
228	33	8	46	16	71	54	新勅撰
91	18	4	22	6	8	33	統後撰
1500	169	96	294	137	258	546	

右によると、新古今集歌は五三一首で全抄出歌数の三分の一を超え、特に秋部・冬部・雑部は各四割を超える抄出数であり、新古今集歌の占める比重は極めて重く、新古今集尊重の傾向が顕著であるが、恋部のみは新勅撰集歌が多いのが注目される。

もつとも新古今集歌尊重は肖柏独自のものとは考えられず、例えば「連歌寄合集」に引用された歌数をみると、古今一三三、後撰三七、拾遺四五、後拾遺一一、金葉七、詞花一三、千載一一、新古今一二九、新勅撰二、統後撰一、統古今四、統拾遺一、玉葉三、統千載一、統後拾遺一、風雅二、新拾遺一であつて、証歌として引用される歌は古今集を除けば新古今集歌が圧倒的(注)に多いことからみてもこの傾向は連歌師一般のものであつたと云い得るであらう。しかし、肖柏の場合、文龜三年「九代抄」を抄出した翌永正初年に「六家抄」を抄出していることを考え合わせると、おそらく肖柏は「九代抄」抄出を契機に「六家抄」抄出を思いついたと思われ「九代抄」における新古今集尊重が新古今主要歌人各家集からの秀歌抄出に発展していったのだと云うことができよう。そして「九代抄」は、例えば「六家抄」を書写した宗諷がさらにそれから五二九首を抄出し、「此一冊為平生懐中之」(陽明文庫「六家内抄出」としたことく、単なる秀歌撰にとどまらず実作上の本歌取や証歌とすべき秀歌撰の

性格を有するものであつたと考えられる。

二、諸本

「九代抄」の諸本は「六家抄」のごとく増補された過程をもたず同一祖本から派生したものであるが、凡そ三類に分つことができる。以下簡単に諸本分類に従つて書誌的解題を加えておく。

第一類本

1、内閣文庫本(函架番号 和200-97)

列帖装一帖。薄墨表紙。縦25・0センチ、横16・5センチ。外題は左肩にうちつけ書で「九代抄」とある。室町中期写。本文料紙斐楮混漉。一面十二行、和歌一首一行書。下に作者名を記す。集付・部立名・歌題注記は一切ない。墨付六四枚。奥に、右一冊、従後撰集致・統後撰集、唯捨遮眼銘肝之作、書者一千五百首号九代抄也、送春鐘尽秋漏而閑窓勅之、専老懶難堪博覽又思童叟之不及深求耳。

文龜第三曆孟冬上旬

夢庵老判

とあり、裏表紙見返しに「牡丹花門人等惠筆」とある。等惠は「明名録」注記に「堺住、阿弥陀堂、天下ノ源氏説也、又歌道

ノ達者也、号清齋」とある^(注5)。坪連歌師である。本書は秋部四六三、冬部新勅撰卷頭歌六七五、恋部七二七、七四四、八二五、および雑部拾遺集一〇四九—一〇六〇の二二首の都合一七首の欠歌がある。巻頭歌の脱落は不可思議であるが、おそらく原本には集付はなかったものと思われ、雑部二一首は一丁一面の欠脱である。本書は「九代抄」諸本中最も古いもので、肖柏抄出の原本に近いと思われるのは、秋部二六九。

山さとの物さひしきは萩のはなひく毎にそおもひやらる、

左大臣

とあり、他諸本はすべて作者名の左大臣を欠き説人しらずの前歌に続く歌としている。もともとこの歌は歌順が前後しており前歌の天智天皇御製「あきの田のかりほの庵の」は他諸本ではこの歌の後にあり、この方が後撰集の歌順と合致するのであるが、左大臣の作者名を有する点原形をとどめている。

また、恋部後撰集七〇五の作者名を欠いているが、他諸本はすべて「よみ人しらず」とあり、有注本の松平文庫本のみが、「説人^(ア)不智^(イ)ニ源^(ニ)たのむ」とある。後撰集では源たのみであり、おそらく原本が作者名を欠いたのであろう。また、七一〇は「坂上是則」とあり、他諸本は「よみ人しらず」第三類東洋文庫本のみ「よみ人しらず^(イ)坂上是則」とある。これも坂上是則

が正しく、第二類本以下の誤りである。

なお、本書の他諸本と異なる排列異同は、以上の外に冬部新勅撰六九〇家隆歌が続後撰集二首目に入り、恋部七一九と七二〇の歌順逆、かつ七一九の作者名「兵衛」を欠く。歌順異同は雑部一四四六、一四八五にもあり、冬部新古今西行歌「さひしさにたへたる人の又もあれな庵ならへん冬の山さと」が並んで重出している。

本書は以上のごとき欠歌や歌順排列の異同を有するが、奥書に云う一冊本の形体を有し、集付や部立注記を持たない、現存本最古の書写本として原本の倣をとどめている。

第二類本

2、甲南女子大学図書館本

列帖装二帖。全欄表紙。縦25・5センチ、横17・5センチ。題簽は中央に金地小短冊「九代抄上」「一下」とある。見返し金泥雲形模様。本文料紙斐楮混漉。一面十行一首一行書。作者名も一行に書く。室町中期写。内題に「九代抄上」「一下」と記す。墨付上帖六九枚、下帖七八枚。奥書は前掲の通り。桐箱蓋に金で「九代抄姉小路清繼御筆二冊」とあり、又箱底に貼紙して、

「九代抄 宗祇法師撰

後撰 拾遺 後拾遺 金葉 詞花 千載 新古今 新勅撰

統後撰 (撰者名を朱注記)

此二冊者姉小路濟繼卿筆

にして紀伊大納言殿

聖上ヨリ拝領ニ相成しを

大納言殿より拝領之也

慶応元年

乙丑九月 岡本黄中

とある。本書の欠脱歌は冬部六一八の一首のみである。ただし、上帖三三丁と二四丁、下帖四丁と一三丁が錯簡である。諸本と異なる歌順排列として春部一〇四と一〇五、夏部二〇九と二一〇、秋部四五五と四五六、四三二が三首後に入り、冬部六六八と六六九の歌順が逆である。集付・部立名歌題注記は一切なく原本の傍をとどめている。

3、大東急記念文庫本(41・3・1・2992)

袋綴一冊。花紋菱模様表紙。縦27・2センチ、横20・0センチ。外題は左肩にうちつけ書で「九代抄」とある。一面十行一首一行書。料紙は赤・黄色違い混綴の楮紙。江戸初期写。「連歌師里村昌通 九代抄一冊」の極札がある。本書を第二類に分類するのは、奥書署名が「文龜第三曆孟冬上旬 夢庵拙子」とあること。また、歌順排列の異同が春部一〇四と一〇五、冬部

六六八と六六九逆で甲南女子大図書館本と一致することによる。たゞし本書には集付が記されている。本書は欠脱歌多く、恋部八〇五―八一九、雑部二二八四―二二九四の都合二一首が欠け総歌数一四七九首である。

第三類本

(A) 4、東洋文庫岩崎本(三F_aへ・75)

列帖装一帖。表紙萌黄絹地に金で草花雲様を描く。縦25・6センチ、横17・0センチ。題簽中央に小短冊「九代抄蓬花軒肖柏之書」とある。見返し金箔散らし。一オに「英王堂藏書」の朱印。一面十一行一首一行書。料紙斐楮混漉。墨付一三三枚。室町中期写。本書は「九代抄」諸本中唯一の欠歌のない整備された完本である。ただし、次の五首を小書入している。

春部、新古今巻頭歌 七八 撰政太政大臣

(1) みよし野は山も霞て白雪のふりにし里に春はききにけり

夏部、拾遺 一七八 平兼盛

(2) 深山出でて夜半にやきつる郭公眺かけてこゑのきこゆる

秋部 新古今 四五五 匡房

(3) 妻こふる鹿のたちとを尋ればさやまかす所に秋風を吹

冬部 詞花巻頭歌 五九三 好忠

(4) 楸生るさはへのあさち冬くればひはりのとこそあらはれにけ

る

恋部 新古今巻頭歌 八三〇 よみ人しらす

(5)よそにのみ見てや、みなんかつらきやたかまの山のみねのし
ら雲

本書の今一つの特徴は、集付を朱書（金葉集のみ「金」と墨書）首書し、また雑部に各集の部立名、雑春、雑恋、哀、囁、尺、誹などを注記し、王昭君、遊女、中道観などの歌題を頭書していることである。「九代抄」原本にはもともと右のごとき集付、部立名歌題注記はなかったものと思われ、右の小書入五首中三首が抄出集の巻頭歌であることを考えると、もし転写祖本に集付が施されていたとしたら書き落すことはなかつたらうと思われる。とすれば東洋文庫本以後集付、部立名歌題注記がなされたことになる。

本書には処々校合の跡がある。例えば秋部三三九

山里の門田のいねのほのなほと明るもしらす月をみる説

や恋部七五五

あらちおのかる屋のさきに立鹿ゆきのいとわれはかり物は思はし
などの類であるが、完全に一致する校合本は現存しない。おそ
らく第三類本異本系あたりで校合したものか。独自の排列異同
は冬部六七四が他本では六七〇の次にあり、六七二がその後

きており、集排列とも合致するので本書の誤記と認められる。

本書は一帖本であるが、内題には「九代抄上」「一下」とあり
本書の書写祖本は既に二冊本であったことが明らかである。と
もあれ、本書は「九代抄」諸本中唯一の欠脱歌を有さない完本
であり、かつ集付、部立名歌題注記をもった最も整備された本
である。

5、宮内庁書陵部本（五五三一一三）

列帖装一帖。焦茶表紙。縦25・5センチ、横17・8センチ。

題簽左肩に小短冊があるが、記入なし。斑山文庫の印があり、
高野辰之旧蔵本。一面十一行、一首一行書。料紙斐楮混漉。墨
付一三三枚。奥書の次に、

文亀第三曆孟冬上一旬 弄花軒肖相

とあり、次に

依晃盛御所望染墨筆者也

天文八年初秋上旬

浄通（花押）

の奥書がある。

本書は東洋文庫本が小書入した夏部一七八、秋部四五五の二
首を欠き（ただし、七八、五九三、八三〇あり）冬部六七四、
六七二の歌順排列も同様であって第三類本と認められる。本書
独自の異同としては、春部一二二（八条院六条）の歌および作

者名、恋部九〇八の歌および次歌の作者名（後京極撰政太政大臣）、雑部一二七八の歌および作者名（俊成）、同部一三八五と次歌の作者名（蟬丸）を欠いている。また秋部三七四の作者名が次歌にずれて三首が別人の歌となったり、恋部七七二、七七三の作者名を通信（道信）西宮左大臣（西宮前左大臣）と記すなど誤写が目立つ。集付・部立名歌題注記は東洋文庫本と同系統である。総歌数一四九四首。

6、岩国・吉川家本（第一八類・一六）

袋綴二冊。黒表紙。縦25・1センチ、横18・6センチ。題簽左肩に「九代抄上」「一下」とある。一面十行、一首一行書。

江戸中期写。料紙楮紙。墨付上冊六九枚、下冊七八枚。奥書の奥に

文亀第三曆孟冬上旬 弄花軒肖柏

牡丹花判

とある。本書は夏部一七八、秋部四五五、恋部八三〇の三首を欠き、冬部六七四、六七二の歌順、集付、部立名歌題注記を具備し、第三類本と認められ、また秋部三七四の作者名を欠き、三首が別人歌となる誤記など宮内庁書陵部本と同じで、同系統本である。

7、竜谷大学図書館本（021・341・1）

列帖装一帖。素表紙。縦22・5センチ、横17・8センチ。外題は左肩にうちつけ書で「九代抄」とある。一面十一行、一首一行書。室町中期写。料紙斐楮混漉。墨付一二二枚。

本書は、巻首の一二九首を欠き、春部・新勅撰 一三〇

花なれやと山の春の朝ほらけ嵐にかほるみねの白雲の歌から始まる。裏表紙見返しに金散らし雲母切箔あり、もとは立派な装幀をもつた本であつたらしいが、表紙が失われ、本文巻首も散佚したらしい。奥書の奥に、

文亀第三曆孟冬上旬 弄花軒肖柏

の署名がある。集付は朱書、部立名歌題注記を墨書する。夏部一七八、秋部四五五を欠き、冬部五九三は作者名と「秋おふる川辺の」までを記している。冬部六七四、六七二の歌の排列異同も東洋文庫本と同様で第三類本系である。総歌数一三六八首である。

8、高松宮本

列帖装一帖。織紋模様表紙。題簽左肩に「九代抄」とある。

一面十一行、一首一行書。江戸期写。奥に、

此抄只拾遺眼銘肝之作、春日秋宵之間於閑密書之、專為老情之難堪博覽又思童蒙之不及深求也

文亀第三曆初冬上旬夢庵老人

(花押)

とあって、他本に比して簡略な奥書となっている。本書は夏部一七八、秋部四五五、冬部五九三、恋部八三〇を欠き、冬部六七四、六七二の歌順も第三類本の特徴を示しており、集付は朱書(ただし、部立名歌題注記はない)しており、第三類本系である。ただし本書はこれ以外の独自の欠脱・錯簡が多く、春部七三一九七の二四首、一一〇、秋部四七九を欠き、五二一一五四六の二五首、冬部五八九、恋部七五〇一七七二の二三首、雑部九七七一〇〇〇の二四首、一二〇七一―二二九の二三首など一二二首を欠脱し、また恋部八七八と八七九、九五一と九五二の歌順が逆であり、八九丁と七四丁が錯簡である。総歌数一三七四首。

9、神宮文庫本(三一三五七)

袋綴一冊。青波線模様楕圓紙表紙。縦27・0センチ、横20・5センチ。題簽左肩に「九代集」とあり、下に朱で「完」とある。料紙楕圓紙。一面十一行一首一行書。江戸初期写。墨付六九枚。奥書は「号九代集也」とある外は他諸本に同じ。奥に、

文亀第三曆孟冬上旬 弄花軒肖相

牡丹花判

とある。秋部四五五、恋部八三〇を欠き(ただし、春部七八、

一七八、冬部五九三あり)六七四、六七二の歌順も第三類本の特徴を有する。本書独自の異同としては秋部五二二が欠脱する外、排列異同として恋部七二〇の歌が七一三の次に、九三三と九三六の歌順逆、雑部一一一八が一一〇七の次に、一二三二と一二三三、一二三八〇と一二三八一が歌順逆、また雑部一四〇五(寂然法師)の歌は新勅撰四首目一四一七の次に、一四〇七の歌は一四〇五の次にくる排列異同がある。集付を有するが処々欠脱している。

(B)10、北野神社本(北野文庫三三九二号八・一下)

列帖装一帖。濃紺地に金で草花雲形模様を描く。見返し金布目押。題簽なし。内題「九代抄」縦20・8センチ、横12・9センチ。料紙下袋楕圓紙。一面九行一首一行書。下に作者名を記す。江戸初期写。墨付八五枚。夏部七八、秋部四五五が欠歌(ただし一七八、五九三、八三〇あり)六七四の排列は正常であるが、六七二が第三類本と排列同じ。集付を有する。本書独自の排列異同は三八八と三八九、九一〇と九一一の歌順逆である。作者名を歌の下につめて書いたためか略式の記入で、しかも誤写が多い。奥に、

右一冊、従後撰集至統後撰集只拾遺。遮眼銘肝之作、以書者一千五百首号九代抄也。送春鎖尽秋漏而閑窓勸之、専老懶之難

堪輿又恐童蒙之不及深求耳

文龜第三曆孟冬上旬 夢庵老拙判

とある。一部に第三類本の特徴を有するが、本文は東洋文庫校合本と一致するところが多く、第三類異本系末本とすべきである。

三、有注本について

「九代抄」には古くから注釈を付した本がある。もつとも伝本は極めて少く、矚目しえたのは赤木文庫本・松平文庫本「九代集抄」と内閣文庫本「九代抄」有注本のみである。

1、赤木文庫本

列帖装二帖。萌黄絹表紙。縦24・8センチ、横18・4センチ。題簽左肩に「九代集抄口」「九代集抄坤」とある。一面十二行一首一行書。料紙斐紙。室町中期写。墨付上帖一四七枚、下帖一六九枚。内題「九代抄上」「一下」とある。下帖奥に九代抄諸本と同じ奥書があり、奥に、
文龜第三曆孟冬上旬

夢庵拙子在判

とある。「九代抄」諸本との歌の異同を検すると、秋部三七二

の歌および次歌の作者名、雑部一二二〇の歌および次歌の作者名を欠く二首の欠脱がある。また、歌順異同では春部一六二と一六三、秋部五〇八が五一〇の次に、冬部六四八と六四九、恋部七一〇と七一、九〇一と九〇二、雑部一二四七と一二四八、一四四七と一四四八、一四八六と一四八七の歌順が逆で八首の排列異同がある。これらの欠脱歌、歌順排列の異同は他諸本と合致するものがなく、特に欠脱歌二首は共に歌と次歌の作者名を欠く特異な欠脱で、おそらく目移りによる偶然的な欠脱と考えられ、「九代集抄」の依拠した「九代抄」は東洋文庫本のごとき完本であったと思われる。ただし、第三類本の六七四、六七二の歌順異同はなく、奥書署名も「夢庵拙子」とあって第二類本の署名と一致するのであるが、本書が第三類本と関連の深いことを示すのは集付および部立名歌題注記である。特に部立名歌題注記が注目されるのでその状況を表示すると次のごとくである。

春部

番号	歌題	洋本 東文庫	木本 赤文庫	平本 松文庫
16	4 恋		○ ○	○ ○
	田家興			
番号	歌題	洋本 東文庫	木本 赤文庫	平本 松文庫
72	65 海上眺望		○ ○	○ ○
	古郷花			

515	514	466	448	446	437	425	424	408	407	376	282	281	276	272	秋部	181	117	夏部	112	97	90
田家秋興	深山見月	深山秋夕	田家秋興	田家秋興	述懷	同題	深山月	海邊秋夕	深山秋夕	恋	駒迎	駒迎	恋	恋		恋	恋		寄花述懷	古鄉花	月前花

○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○	○		○	○	○
○	○	○	○	○	○	○			○	○		○	○	○		○	○		○	○	○

860	859	843	839	809	808	768	764	755	747	702	恋部	682	649	646	642	637	冬部	553	543	522	517
深山恋	寄雲恋	折不逢恋	深山恋	寄石恋	折不逢恋	不逢恋	後朝恋	寄猷恋	閑居恋	初恋		庭上霜	恋	恋	懷旧	深山恋		月多秋友	秋夕	述懷	同題

○		○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○	○	○	○
○	○	○	○		○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○		○	○	○	○

1040	1038	1023	1019	1018	1014	1011	1005	984	982	974	971	970	969	966	965	雜部	944	911	904	871	864
別	賀	哀	同恋	雜賀	賀	雜秋	雜春	雜	物名	別	賀	哀	賀	旅	別		遠不逢恋	別恋	別恋	眼眼恋	閑路恋

○	○	○	○	○		○	○		○					○	○		○	○	○	○	○
○			○	○			○		○		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○
○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○

1195	1193	1186	1185	1182	1180	1163	1161	1160	1155	1146	1145	1123	1122	1113	1101	1099	1096	1089	1063	1055	1048
河水久澄	月多秋友	賀	賀	勅	誹語	雜	同	賀	哀	旅	別	雜	賀	王昭君	誹語	假風陰品	祝	神	雜	哀	野

			○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○
	○	○								○		○	○	○	○	○	○	○	○		○
○	○	○								○		○	○	○	○	○	○		○		

1417	1414	1396	1388	1350	1273	1230	1225	1197
旅	賀	釈教	神	遊女	雅	旅	別	宴
○	○	○	○	○	○	○	○	○
		○	○		○	○	○	
		○	○	○	○	○	○	

1437	1433	1432	1430	1428	1426	1425	1423
雑	必是詐	経教如鏡	中道觀	薩埵王子	阿含	尺	神
○	○	○	○	○	○	○	○
○		○	○	○	○		○

右の表によつてみると、第三類本東洋文庫本には春部から恋部までは歌題注記がないが、雑部では部立名、歌題注記は東洋文庫本の方が「九代集抄」本に比して多いことが明らかである。従つて「九代集抄」から第三類本への影響とは考えにくく、「九代集抄」が第三類本の部立名、歌題注記に依拠したと考えられるのである。今日「九代集抄」の底本となつた「九代抄」がどの系統本であつたか明確ではないが、第三類本と極めて関連深いものであつたことは云いうるであらう。

2、島原、松平文庫本（松二二一一）
袋綴四冊。背地蓮花文様押表紙。縦27・3センチ、横20・0センチ。題簽左肩に「九代集抄一春」「二秋」「三恋」「四雑」

とあり、内題は第一冊に「九代抄上之一」第三冊に「九代抄下卷之上」とある。料紙楮紙。江戸初期写。奥書は赤木文庫本と同じ。本文も赤木文庫本と同系統で、欠脱歌、歌順排列異同も同一である。ただし、本書独自の欠脱として、秋部四一六の注および四一七の歌を欠き、四一六の歌の注に四一七の歌の注が接している。また恋部八五二の歌および注が欠脱している。赤木文庫本と本書との関係は同一系統であるが親子関係ではなく、同一祖本からの書写本と考えられる。例えば、

夏部二三五 経信

さなへとる山田のかけひもりにけりひくしめなほに露そこほる、

山畦早苗と云題にて也、なほしろにしめを引御幣をたてなとするは消降（注）にして田作の折禱の心なり、水をつ、む間もらぬ也、さなへをとる比なれば水かもある也（松）、さなへとる時節の興（松）云しおもしろきとなり

秋部五一二 中原師季

まちえても心やすむる程そなき山の端ふけて出る月影
山のは出る月の夜ふけて出たれば心をやすむるまもなきと也（松）、ふけはて、山のはを出そめたる月なればやかて夜かあけへきと也

のごとく、松平文庫本が欠脱した注の箇所もあるが、逆に赤木文庫本が欠脱した文を補う箇所もある。

春部三三 上東門院中将

思ひやれ霞こめたる山里に花待程の春のつれく

さなきたに山里はつれくなるに、かすみにこめられて花をまつ山里（赤ナシ）の躰おもひやるへし、はなを待心は深重成へし、

つれくはとせんと云心也、さひしきにてはなし

かくて松平文庫本は、赤木文庫本と同一祖本から書写されたと思われるが、夏部二二四

などてかくおもひそめけむ時鳥雪のみ山ののりの声かは

の第五句は「九代抄」諸本および赤木文庫本に「のりのすまかは」とあり、千載集には「のりの声かは」である。注には「臘月八日釈迦仏の雪をいたきてとかれたるのりのすまにてもなきになとかほとに」とあつて原本は「のりのすまかは」であつたと思われる。また恋部七〇五の作者名は内閣文庫本が作者名を記さず、他諸本はすべて「よみ人しらず」であるが、本書のみが「説人不智（マ、ニ）源たのむ」とあり、後撰集は「源たのむ」であつて、松平文庫本が何によつて正したかは明らかでない。ともあれ、松平文庫本は赤木文庫本と祖本を同じくする同系統本として、欠脱はあるが、赤木文庫本を補うものである。

3、内閣文庫本（和二〇〇一—一〇〇）

袋綴二冊。薄青表紙。縦27・4センチ、横18・6センチ。題簽は兩冊ともに摩滅して「口代抄」とみえる。内題は「九代抄上」「九代抄下」とある。一面十一行、一首一行書。墨付上冊一〇二枚、下冊一一〇枚。下冊奥に

秘歌

うらやまし伏猪の床はやすくとも歎くもかたみねぬも契りを浪のよる浦半の月をふもとにてまつ袖しほるみねの松風老の友月のみやこのあけかたにこ、ろある人のこ、ろをそしる

かすみつ、花ちる山の朝ほらけ後にや風のうさもしられん

春の花秋の月にも残りけりこ、ろのはては雪の夕くれの五首を記し、次に

右一冊、従後撰集至統後撰集、拾遺眼銘肝之作、書者一千五百首号九代抄也、送春鐘尽秋漏而閑窓勅之、專為老懶之難勸博覽又思童叟之不深求耳

文龜第三曆孟冬上旬

弄花軒肖柏牡丹花在判

享保十九寅年冬

藤原盛武写之

とある。本書は本文に勅撰集名を記し、次に部立名を記す。作者名の記入はなく、歌題注記の類は一切ない。歌の異同を検すると、恋部八三〇、雑部一一一七、一三八一（この歌の注は一三八〇の歌に接続している）の三首が欠脱し、歌順異同は、春部新古今一一四の次に新勅撰一二二、一二二の二首が入り、夏部三三〇と三三二、秋部四二五と四二六、恋部七四七と七四八、九六三と九六四の歌順がそれ／＼逆で、雑部一三三七—一三四〇の四首が一三五〇の次に位置する。こうして本書は「九代集抄」とは明らかに別本である。奥書署名や恋部新古今巻頭歌八三〇を欠くことなどに注目すれば第三類本ではなかつたらうか。

本書の注も「九代集抄」とは別注である。巻頭歌注を掲げると、

1 降雪のみのしるころも打きつ、春きにけりとおとろかれぬる

正月朔日にしろきおほうちきを給てよめる、みのしろ衣と

はみの、かはりにきる衣也、雪はふりながら彼衣装にて春

とおとろきたると也、賚代衣とは白き心に詞をつかふとな

り、小うちきといふ衣装もあり

〔九代集抄〕元日に大うちきを給てとあり、大うちきとは上にかきる物也、しろきこ、ろあり、哥の心はふる雪のみのしろこ

ろもをきつ、春きにけりとおとろくとなり、大うちきを給て（おとろくと也（松本））、春と小うちきといふものあり、みのしろ衣みの、代にきるころもはゆきは降なからかの衣裳にて春とおとろきたる也、又後撰とは古今に残たるを撰故也、後撰、拾遺にて古今の秘事多分しる、こと有と也、九代抄とは従後撰集至統後撰抄出之心也

両書注を比較すると「九代集抄」の冗漫な注に対して「九代抄」有注本の方が整備された注となっている。しかし内容的には類似している。さらに顕著な例を掲げると、

夏部 一八四

見わたせは浪のしからみかけてけりうの花さける玉川のさと

玉川は所々にあり、是は津の国也、浪のしからみかけたるやうに卯花を見たる也、しからみとは浪にてせきたてたる

也、玉川七所にあり、千鳥疑冬などもよめり、けりの消濁はすみたるがよき也、一条殿御説によつて宗祇是を用ひられし也

〔九代集抄〕

たま川日本に七所有、これは摂州也、風のかけたるとこそあるにのみしからみかけたるはあたらしきことは也、浪のしからみかけたるやうに花を見たる也、なみにて水をせきた

てたる躰也、玉河は千鳥山ふきなどもよめり、又けりの清濁はすみたるかよきと一条殿御説により宗祇用られしと也のごとく、殆どそのまま取つてゐる箇所もある。しかし、本書は「九代集抄」の注を要約したものというわけではなく、作者は「九代集抄」を異本、異注として扱つてゐる。

春部 一一〇

桜色の庭の春風跡もなしとは、そ人の雪とたにみん

イ本桜色の風とは、けふこすはあすは雪とそ降なまし消すは桜に吹風也、又色々ありとも花と見ましや、桜色になりたる敷様也、花をちらしたる風も跡なく成て人もとはねは雪とみる人もなきと也

〔九代集抄〕けふこすはあすは雪とそふりなましきえずはあり共花と見ましや本哥也、桜色の風とはさくらにふく風也、またいろ／＼しきさま也、花をちらしたる風もあとなくなりてもとはねは雪と見る人もなきと也

のごとく、上冊では欄外や行間に異本として「九代集抄」の注を掲げ、下冊ではさらに本文化して異注として掲げる。下冊巻頭注を示すと、

恋部 六九七

おもひ川たえすなかる、水の泡のうたかた人にあはて消めや水の泡をもうたかたといふ、此うたかたはいかてといふ詞也、いかて人にあはて消めやと也、異註に思ひ川絶す流るゝとは涙也、うたかたはいかて也、水の泡のうたかたと謂也、又僻案にすみて吉といへり、泡のやうなる身躰なれともあはずしてはいかてかきゆへきそと也、うたかた万の詞也、下巻取分秘事也

〔九代集抄〕おもひ河たえすなかる、とは涙也、うたかたはいかてなり、水のあはのうたかたとうくる也、人僻案に住てよしといへり、泡のやうなる身躰なれともあはずしてはいかてかきゆへきそと也、うたかた万のことは也、下巻とりはき秘事也

のごとくである。もつとも右の「九代集抄」注の対比は全巻に亘るものではなく、上巻は処々欄外ないし行間に記し、下巻は恋部後撰集歌のみであることからみておそらく後人の施したものであろう。従つてもとは全くの別注であつたと考えられるが内容的に「九代集抄」の影響が色濃く、おそらく「九代集抄」成立以後の成立であつたと考えられる。

〔九代集抄〕の注作者について前稿で首柏門第等清周辺連歌師と推定したが、〔九代抄〕有注本の注作者は全く不明である。

なお、松永貞徳は「九代集抄」批判として「九代抄抜書貞徳加註」を書き、さらに改稿して六家集注を加えた「九六古新註」を書いたが、これらについても前稿で述べたので参照頂ければ幸いである。

- 注
- (1) 木藤才蔵「連歌史論考下」(明治書院、昭48刊)五四二頁。
 - (2) 「中世歌壇史の研究 室町後期」(明治書院、昭47刊)一九九頁。
 - (3) 前掲「連歌史論考下」五五〇頁。
 - (4) 木藤才蔵、重松裕巳編著「連歌寄合集と研究(下)」(未刊国文資料刊行会、昭54刊)七〇頁。
 - (5) 前掲「連歌史論考下」五三八頁。
 - (6) 「九六古新註」考(甲南国文、昭54・3)